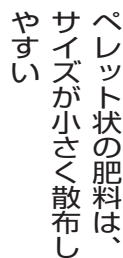


指定混合肥料」利用を実証

福岡県久留米市 荒巻 耕太さん



荒巻さんは、同町の24人が所属するJAみい青果ほうれん草部会で、部長を務める。指定混合肥料は、大日本産肥社製のペレット「e・green」（14-5-5）を使用。9月中旬播種のホウレンソウ「ドンキー」で、関係機関の協力のもと、従来の粒状化成肥料（14-14-14）と、コス

「肥料を替えても、うまく育っている」と、
ハウレンソウの品質を確認する荒巻さん

る。

トや品質を比較した。基肥として10畝当たり140キを施用し、肥料コストは同量での化成肥料に比べて10畝当たり約4500円減の約1700円にできた。

生育日数42日の10月下旬収穫で、株当たりの全重量や草丈などは同等だった。葉色の計測値はやや薄かった。

種のドンキ、10月中旬播種の「福兵衛」「プログレス」でも利用。11月下旬時点で順調に生育している。グランドソーによる散布は粒状肥料に比べ出にくい点があったが、「開度を調整すれば使い勝手は変わらなかった」と話す。荒巻さんは「寒い時期も含めて、

たが、荒巻さんは「品種の違いは「品種の違いは」程度の誤差で、問題ない」と説明する。

どこのくらい肥効が続くのかを確認していきたい」と話す。

化成肥料に比べ、取り出し時に、粉じんや堆肥の

地域では、ホ
ウレンソウを、
稲発酵粗飼料
(WCS)の後
おいがあるため、散布機な
どに移す際は、マスクを着
用し、風向きなどに気をつ
けている。

再生リンなど
未利用資源を活用

土壌診断

ソウは栽培期間も短く、有機物すき込みなどで、リン・カリが一定量確保できるとみられる。

e・greenは、福岡市の和白水処理センターから回収された再生リンと、県内の家畜ふん堆肥を原料に含み、製造コストを抑えた。ペレットは長さ4ミリ前後、直径3ミリ前後と小さく、機械散布しやすくしている。

基肥重点に変え
施用を省力化

基肥重点に変え
施用を省力化

施設コマツナが経営の中心で、ホウレンソウは露地で6ヶ栽培。施肥の省力化も意識し、基肥の施肥量は20〜40^キ増やし、従来の追肥散布を省略する。

同部会に所属する鐘江政義さん(39)は、10月上旬播種と話す。